

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

中国人日本語学習者のためのコロケーション学習の指導法に関する基礎的研究
—作文データに基づく「名詞+を+動詞」のコロケーションを中心に—

氏 名

李文平

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は学習者の実際の言語運用データを利用し、コロケーションの使用状況を分析し、コロケーション習得における問題点及びその原因を明らかにし、その結果を日本語教育現場に生かすことができる知見を得ることである。そのために、本研究では学習者による作文データから「名詞+を+動詞」パターンのコロケーションを抽出し、習熟度の異なる学習者間の比較を通して、学習者のコロケーション使用に関して多方面から分析を行った。得られた結果から日本語の「名詞+を+動詞」パターンのコロケーションの使用状況、習得の問題点及び問題点の原因とした母語の影響の説明も試みた。

本研究は、8章からなり、各章の内容を以下のようにまとめる。

第1章は、序章として本研究の研究背景、研究目的、研究方法と研究の構成を説明する。近年、第二言語習得研究において、コロケーションを習得することは、母語話者らしい流暢さや自然さに達するための最も重要な要因の一つとされ、コロケーションの重要性が指摘されている。コロケーションの中でも「名詞+を+動詞」パターンのコロケーションは一般語のコロケーションにおいて最も多く(秋元2002)、そして完全節(fully formed clause)の命題上の中核部を表しており(Howarth, 1998)、さらに学習者にとって習得が難しい(Gitsaki, 1996; Nesselhauf, 2005)。効果的な「名詞+を+動詞」のコロケーションの教育指導を行うためには、実際の言語運用において学習者によるコロケーションの使用状況や、習得の問題点及びその原因を究明する必要があるとされている。しかしながら、これまで日本語の「名詞+を+動詞」のコロケーションに関する使用状況の記述や習得に関する研究は限られている。そのため、本研究では学習者の作文データに見られる「名詞+を+動詞」のコロケーションを対象に、習熟度の異なる学習者間の比較を通して、コロケーションの使用状況を調査し、習得における問題点及びその原因を分析した。

第2章では、先行研究について述べる。まず本稿におけるコロケーションの概念を示す。これまでの日本語学分野で語と語の結びつきは、慣用句、連語と語連結に分けられる。近年、日本語教育分野では、日本語学での語と語の結びつきの分類に基づいた上で、コロケーションの範囲を広くとら

える傾向が見られた。その理由は2点挙げられる。一つ目は、外国人日本語学習者の場合には、語と語の結びつきにおける個々の構成要素の意味が必ずしもわかっていないことが挙げられる（阪田1990）。つまり、母語話者にとって「風呂を沸かす」のように、全体の意味は個々の語の意味からすぐ分かるような表現、あるいは常識から誰にでも作ることができるような表現は、学習者にとって慣用的な結びつきである場合も多いとされている（大曾2005）。二つ目は、語連結に分類可能な結びつきは、学習者の母語の影響によって誤用をおかすことが挙げられる。例えば、「薬を飲む」や「知識を得る」のような語連結とされる表現は、学習者の母語の影響によって「*薬を食べる」、「*知識を勉強する」が正しいと考える可能性がある。このような指摘を踏まえ、本研究では日本語教育の立場から、語連結もコロケーションとして扱うことにする。

次に、第二言語としての英語のコロケーションの習得研究、及び日本語におけるコロケーションに関する先行研究を概観した。その結果、次のような問題や課題がまだ残されていることが明らかになった。まず、これまで中国人日本語学習者のコロケーション習得についての研究は十分とは言えず、特に、学習者のコロケーションの使用状況を調べた研究が限られており、学習者によるコロケーションの使用状況はまだ明らかにされていない。このような現状において、まず学習者のコロケーションの運用能力の発達に関わる要因を検証し、コロケーション教育において暗示的に自然に習得させる指導方法を取るべきか、それとも明示的な指導を行うべきかを明らかにする必要があると考えられる。次に、学習者はどのようなコロケーション違反すなわちコロケーション誤用を犯すか、そしてその原因は何かを究明することが求められる。しかし、コロケーション誤用の原因を究明する前に、コロケーション誤用に対する分類を行う必要がある。同じく「名詞+を+動詞」のコロケーションの誤用においても「*意味を分かる」のような文法的な誤用と、「*知識を勉強する」のような文法的には正しいが、共起によるコロケーション誤用が含まれる。誤用の種類によってその原因も異なるため、「名詞+を+動詞」のコロケーション誤用に対して分類を行い、それぞれの誤用の原因を分析した上で、得られた結果に基づき、より良いコロケーションの教育指導が期待される。最後に、「*知識を勉強する」のように語彙的にも文法的にも正しいが、語と語の結びつきが不自然な誤用、すなわち共起によるコロケーション誤用の背景には母語の影響があると考えられる。しかし、母語の影響は共起によるコロケーション誤用を引き起こすようなマイナスの影響すなわち負の転移のみならず、プラスの影響すなわち正の転移もあると考えられる。「名詞+を+動詞」のコロケーション運用における母語をより適切に扱うために、正用コロケーションと共起によるコロケーション誤用を対象にその母語の影響を検証すれば、得られた結果に基づき、今後のコロケーション教育に母語のプラスの影響をいかに活かし、逆にマイナスの影響をいかに防ぐかという教育指導に寄与できると期待される。これらの問題や課題を明らかにするために、以下の3点の研究課題を設定する。

1. コロケーションの運用能力は日本語能力・語彙能力・文法能力とどのような関係になっているか。
2. コロケーション誤用の客観的な分類はどのようにすれば可能か。
3. Kroll and Stewart (1994), Jiang (2000) と Wolter (2006) の理論モデルによって、正用コロケーションと共起によるコロケーション誤用における母語の影響を説明できるか。

第3章は、コロケーション産出において母語の影響が生じる原因に関する理論的な説明である。まず、L1 単語 (L1 word) と L2 単語 (L2 word) と概念 (concept) の関係を説明した「Revised Hierarchical Model (RHM)」(Kroll & Stewart, 1994) を紹介する。続いて、RHM に比べ母語の影響の仕組みをより詳しく説明している Jiang (2000) のモデルを示し、そしてこのモデルをいかに日本語の「名詞+を+動詞」に応用するかを詳しく述べる。最後に、Kroll and Stewart (1994) と Jiang (2000) の説明していない母語の正の転移と負の転移の区別を、語彙ネットワーク (lexical network) のレベルから解説する Wolter (2006) のモデルを紹介する。これらの理論基盤を踏まえ、コロケーション産出における母語の影響の解明を試みる。

第4章では、研究方法について述べる。まず本研究で使用するデータを説明し、次にコロケーションの抽出方法と、その方法で得られたデータの構成を示す。その後、量的研究における分散分析を行うために、コーパスから得られたコロケーションの粗頻度をどのように角変換 (逆正弦変換) を行うかについて述べる。続いて曹・仁科 (2006) を参考にした上で、改良を行った本研究における誤用分析の方法をフローチャートを用いて説明する。最後に、母語の影響の判断方法として、本研究で提案した直訳の判断方法の試案を紹介する。

第5章、第6章と第7章は、それぞれ本研究の三つの研究課題に対応し、本研究の中心的な内容である。第5章では、コロケーションを明示的に指導する必要があるかを明らかにするために、日本語習熟度の異なる学習者によるコロケーションの使用状況を量的に調査する。第4章で紹介した角変換と分散分析の方法を用いて、日本語能力レベル別・語彙能力レベル別・文法能力レベル別の学習者によるコロケーションの正用率と誤用率の比較を行った。その結果、学習者のコロケーションの正用率と誤用率は、日本語能力レベル、語彙能力レベルと文法能力レベルの初級、中級と上級の間において有意な差が認められなかった。この結果は、Bahns and Eldraw (1993), Howarth (1998), Murao (2004), 及び Laufer and Waldman (2011) の結果と一致している。このことから、従来の暗示的学習において学習者のコロケーションの運用能力の発達は限られていると言えよう。それ故に、今後は教育指導においてコロケーションを重視し明示的に指導する必要があるだろう。

第6章では、第5章の「コロケーションを明示的に指導する必要がある」という結果を受けて、コロケーションを指導する際にどのようなところをどのように指導すべきかを明らかにするために、学習者のコロケーション習得における問題点を分析する。第4章で述べた誤用分類の方法を使用し、学習者の産出したすべてのコロケーション誤用に対し、誤用の分類を試みる。そして、異なる種類の誤用の原因究明や、学習者の習熟度の上昇につれ誤用の変化について分析を行った。その結果、ラベル A 「共起」タイプの誤用は最も多いことが明らかになった。このことから、「*知識を勉強する」や「*歴史を了解する」のような「語と語の結びつき」という問題は学習者のコロケーション産出において最も習得困難な内容であることが分かった。そして、ラベル A 「共起」タイプの誤用は日本語能力レベルが上がるにつれ、増える傾向が見られた。このことから、コロケーションの運用能力が自然に上達しにくいと言えよう。この結果を踏まえ、今後は、「共起」タイプの誤用の産出原因を明らかにした上で、教育と指導において「語と語の結びつき」という共起問題に重点を置くべきであろう。

また、ラベル B 「造語」とラベル C 「文法関係」の誤用分析から、今後の語彙教育と語彙指導において個々の語からコロケーションに移すことが必要であろう。このことによって、学習者のコロケー

ションレベルでの語彙運用能力を高めるのみでなく、コロケーション運用における自他動詞の誤用の減少も期待されよう。それ故に、今後は教育指導においてコロケーションに重点を置き、そしてコロケーションにおける「語と語の結びつき」という共起問題はコロケーションの中で優先して重要視すべき問題であろう。

第7章では、共起タイプのコロケーション誤用と正用コロケーションにおける母語の影響を検証した。その結果、直訳と判断された47項目(60.26%)の誤用表現は母語の負の転移によるものであることが分かった。このことは、多くの「共起」タイプのコロケーション誤用が母語の影響を受けているという結論を裏付ける。また、学習者の第二言語作文において母語の影響を受けて「*知識を勉強する」のような誤用を産出したことは、「学習者のL2語彙項目にL1の意味情報や統語情報が貯蔵されている」というJiang(2000)の理論モデルと一致している。本研究の結果は、中国人日本語学習者の「名詞+を+動詞」のコロケーションの自由産出という点から、Jiang(2000)のモデルを支持する新たな証拠となった。このことは、Jiang(2000)の理論モデルが理解データから産出データへの応用や、英語から第二言語一般への応用や、個々の独立した語彙からコロケーションへの応用などに意義があるとされている。

また、誤用コロケーションにおける母語の影響の結果に加え、正用コロケーションにおける母語の影響の検証も行った。その結果、母語の影響が関わる386項目において、339項目(87.82%)は正用表現で母語のプラスの影響を受けているのに対し、47項目(12.18%)は誤用表現で母語のマイナスの影響を受けていることが分かった。このことから、中国人日本語学習者にとって母語は学習者のコロケーション産出を促進させる働きをしていると言えよう。

さらに、今後母語のマイナスの影響を防ぎ、プラスの影響を活かすために、正の転移が起こった項目と負の転移が起こった項目の差異を明らかにした。その差異は次の2点にまとめられる。第一に、自然な中国語の「動詞+名詞」と日本語の「名詞+を+動詞」のコロケーションが直訳関係でない場合、中国語の「動詞+名詞」が学習者に直訳された表現は負の転移になる。第二に、自然な中国語の「動詞+名詞」と日本語の「名詞+を+動詞」のコロケーションは直訳関係にあるとしても、その中国語の「動詞+名詞」が学習者に直訳された表現は必ずしも正しい日本語の「名詞+を+動詞」のコロケーションになるとは限らない。このことに基づき、今後のコロケーションの教育指導において、直訳できる中国語と日本語のコロケーションのリストと、直訳できない中国語と日本語のコロケーションのリストを提供する必要があると示唆された。

第8章は終章として、本研究の結果と結論をまとめ、これらの成果を利用し、コロケーション教育への応用を検討し、本研究の意義及び今後の課題などについて述べる。今後の課題として、1) 本研究の結果をより大規模のデータにおける検証、2) コロケーションの運用能力を測るテストの開発、3) 直訳の客観的な判断方法のプログラム化、4) 誤用コロケーションはコミュニケーションに与える影響に関する検証、という4つを挙げた。そして、今後はこれらの課題をもって、中国人日本語学習者のコロケーションの運用能力の上達やコロケーション習得の一助になるために、今回の研究を踏まえ、さらなる研究を進めていきたい。